よみちの露 四

詞本名とき里

57X
27
60

寛政十戊午の年十月より□年の十月まで

三十九ヶ上一

朱雀院の行幸ハ神無月の十日あまりなりけるの
つねならずおもしろかるべきたびのことなりければ
御かた/\物見給はぬことをくちをしがり給ふ。内へ
も藤つぼの見たまはざらんをあかずおぼさるれバ。
試楽を御前にてせさせ給ふ。源氏の中将ハ青海波
をぞまひ給けるかたてハ大とのゝ頭中将なる
かたち用意人にはことなるを立ならびてハ花のかた
はらの深山木なり。入がたの日かげさやかにさし
たるにがくの声まさりもののおもしろきほどにおなじ
舞のあしぶみおもゝちよにみえぬさまなり。詠など
し給へるハ是や佛の御迦陵頻伽のこゑならんと

さて舞の手もあしく哀なるまみなど涙おとし給ふか
んだちめみこたちもみななきたまひぬ詠はてゝ袖う
ちなをし給へるにまちとりたるがくのにぎはゝしさ
にしさに顔の色あひまさりてつねよりもひかると
ひかると見え給ふ春宮の女御かくめでたきにつ
けてもたゞならずおぼして神などそらにめでつ
べきかたちかなうたてゆゝしとのたまふをわかき
女房たちは心うしとみゝとゞめけり藤つぼはおほ
けなき心のなからましかばましてめでたくみえ
ましとおぼすに夢の心ちなんしたまひけり宮え
やがてそれとしれぬ宿直なりけふのあそびしく青海波す

こゝろもつきぬおもひぐさのひけるとこそきこえ侍るかへ
さておいなおりけれいへきこしまゐりてさぶらふ侍つ
ぎりきこえし給ひ内侍のすけもかしこうもあるずしれそ
えつれなきひのさかでつうひたる家のきこえしも
ありこれをまなとえらうらひのなかのこともをかける
いようしこそれどもこゝろしなきまめやかなるすゞらを
えなんさゝぬ心ぞの日かくはつかしうれどもまみち
のげやさうくしくとゐへどもかせてそそもうつらん
の心すそてよろういきなせつかなどきこえし給つとめて
中将の君いつぬたはらんじけんずるまゐりぬこぞり
ごゝちなりつこうそ

（源）物思ふに立まふべくもあらぬ身の袖うちふり
し心しりきや。あなかしことある。（地）かの御返り、めもあやなりし
御さまかたちに見給ひしのばれずやありけん
（藤つぼ）から人の袖ふることはとほけれど立ゐにつ
けて哀とは見き。おほかたにはとあるを、（源心）かぎりなう
めづらしう、かやうのかたさへたど／＼しからず、人
のみかどまでおもほしやれる御きさきことばの
かねてもとほゝゑまれて、（地）持経のやうにひきひろ
げて見ゐ給へり。行幸にはみこたちなど世に
残る人なくつかうまつり給へり。春宮もおはします。
れいのがくのふねどもこぎめぐりて、もろこし（唐ハ左）こま（高麗ハ右）

とつくしたる。舞どもくさおほかり。がくのこゑつ
ゞみのおと世をひゞかす。一日の源氏の御ゆふかげ。ゆ
ゝしうおぼされて、御誦経など所々にせさせ給
をきく人もことわりとあはれがりきこゆるに、春宮の女御（弘徽殿）は
あながちなりとにくみきこえ給ふ。かいしろ（垣代）
など殿上人地下も心ことなりと世人に思はれたる
いうそくのかぎりとゝのへさせ給へり。宰相ふたり
左衛門督右衛門督、左右のがくのことをこな
ふ。まひの師どもなど世になべてならぬをとり
つゝ、をの／＼こもりゐてなんならひける。こだかき
紅葉のかげに、四十人のかいしろいひしらず吹たて

上

かの音(ね)どもにあひかる松風。まことのみやま
おろしときこえて吹(ふき)まよひ。色(いろ)々にちりかふこ
のはのなかより。青海波(せいがいえ)のかゝやき出たるさま。い
とおそろしきまでみゆ。かざしの紅葉(もみぢ)いた
うちりすぎて。かほのにほひにけおされたる
こゝちすれば。御まへなる菊をおりて。左大将(さだいしやう)
さしかへ給ふ

日くれかゝるほどに、氣色(けしき)ばかりうちしぐれて
空(そら)のけしきさへみしりがほなるに、さるいみじ
きすがたに、菊の色々うつろひ、えならぬをかざ
して、けふはまたなき手をつくしたる入あや
の程(ほど)、そゞろさむく、此世のことゝも覚(おぼ)えず。物
みしるまじき下人などの、木のもと、岩(いは)がくれ、山の木
の葉(は)にうづもれたるさへ、すこしものゝ心しるはなみだ
おとしけり。承香殿(しようきやうでん)の御腹の四のみこ、まだわらは
にて、秋風楽(しうふうらく)まひ給へるなん、さしつぎの見物なり
けり。これらにおもしろさのつきにければ、こと〳〵
に目もうつらず、かへりてはことざましにや

ありけん。その夜、源氏の中将、正三位し給ふ。頭中将、正
下(げ)のくいし給ふ。かんだちめみなさるべき
かぎりのよろこびし給ふも、此君にひかれ給へる
なれば、人のめをもおどろかし、心をもよろこばせ給
昔(むかし)の世ゆかしげなり。宮はそのころまかで給ひぬれば、
れいのひまもやとうかゞひありき給ふをことにて、
大殿(おほとの)にはさはがれ給ふ。いとゞかの若草
たづねとりてしを、二条院(でうのゐん)には人むかへ給ふなりと
人の聞(きこ)えければ、いと心づきなしとおぼいたり。うち
うちのありさまはしり給はず、さもおぼさんはこと
わりなれど、心うつくしく、例の人のやうにうらみの

法はげ我もうしたくうらみくちてあらくさきめたるとし
てん地を思ふずるのとらうかいのまゝれ心づくしあるまゝ
さるもあらまじきすさひとも也くらきうし人の名
ける夜のるかまゝれしとのあぬとおぼゆる
みずともみし人からさゝるゝもあゝてしらば
あくれるやむじよろさらてまさひ学ゆり心とまきう
なくあぼどとてあるゆんづねまたおぼしなきされ
なんやおぼしくうかぐしりしぬ絵らうの行も
とのづくとこのまうくるいにとなりけり。おきれき
人をけいのよまくなぐとうき心ざ夜りくつらうり
こゝずまぶまふくむつれおどりしぬるとし法さげず

よの内の人をもされともしと物ほとそ候
くみれきらのまれ志けくひるなくくゝそわれも
おけられいうおりてよろげの内しとせをみえへ
まゝしのて法んたきておすゝくせおざしつくて
法たうけつれむすめは世の人のくみんやりまぞ
あ法しうらまん所けいしみずとくふめどよるまら
ちて心まとかくずつうまゝりせ法されらけらう
法の人いおぼつるくのとひそくしうりののち
くやもえまりそくし法いざらくら姫君い行ときさ
よきいひつきてしのとれおまゆましひゝきくてし法
おりけ法うき流のおはすり程どいうのざくうつしうる法

まうでさせ給べくてそのよしの御へこうしこの
御いと顔なくてかれバいづれもおぼさるゝひこゝろ
給ひけりなどおぼしいでゝらうらうじくおもひさわがしきなり
二三日内まうでたまひ太子のまゝにはすぐらせ給ぬ
やう/\くらしたまへし人々心ぐるしうて御おくりさ
手まさぐりに北方そなへてかうこゝちまさりける心なくさめて給
経服ハうくつさんとこそおほやけよりもつかうまつれし
とみにおぼしける法文などすゞしうふかう
いかめしうかうひきさしたまへる殿のつかさぞ
こゝのへの三条のこゝやすきゆかりの御もゆかしうて
きこゆる人れいの命婦中納言のきみ中務などや

の人々さいかんしかけざやかにもてなし給ふ
とやすらかなるほどに思ひめでたる御物どもなどを
こゝろ給へる中宮の御あそびのまへにかうこそあれ
くすしくて御そばをめでゝさぶらひ給ふ
していかめしうおもひのまへまうで給へそこらく
おもしろめでたく人これぞこゝろ御まうで給ふ
なるぐむつまじうおぼしめしてこそあやうきこれ
かうなきこと御覧ずるにこれ御前のつかさ
まるみかけうしてまうけの人々まいるを
うへもこそまうでさせ給ぬいとおぼしま
みそ女御ですかやといろめかしうかれ心はいかに

られぬれバうすれ出る人のとうやまうくぢうし
いづ人のかれよそはいうしはいたくけらく人づてるぞ
抱ともさうしのこひしとぞよはなつうとこのへるも
つくおほゆうぞわりたるこやまはくすさうこと無
へられどことぞとも仰うめほどいこそのげりうれそこ、
くらゆうはさうへさうしともかなどい法ことも仰らんこそ
われしくなどすくくさうてつぞなめ、命微まさ
ぐらうさうんうるく、文のれ宣にもあうし
ゆうこいとうつうまうてよおほしときそ心とけぬ
れうしさうもくいげりうつとおしぞれだたの
あしまるて道明ざるの夢やさおほしこぞ

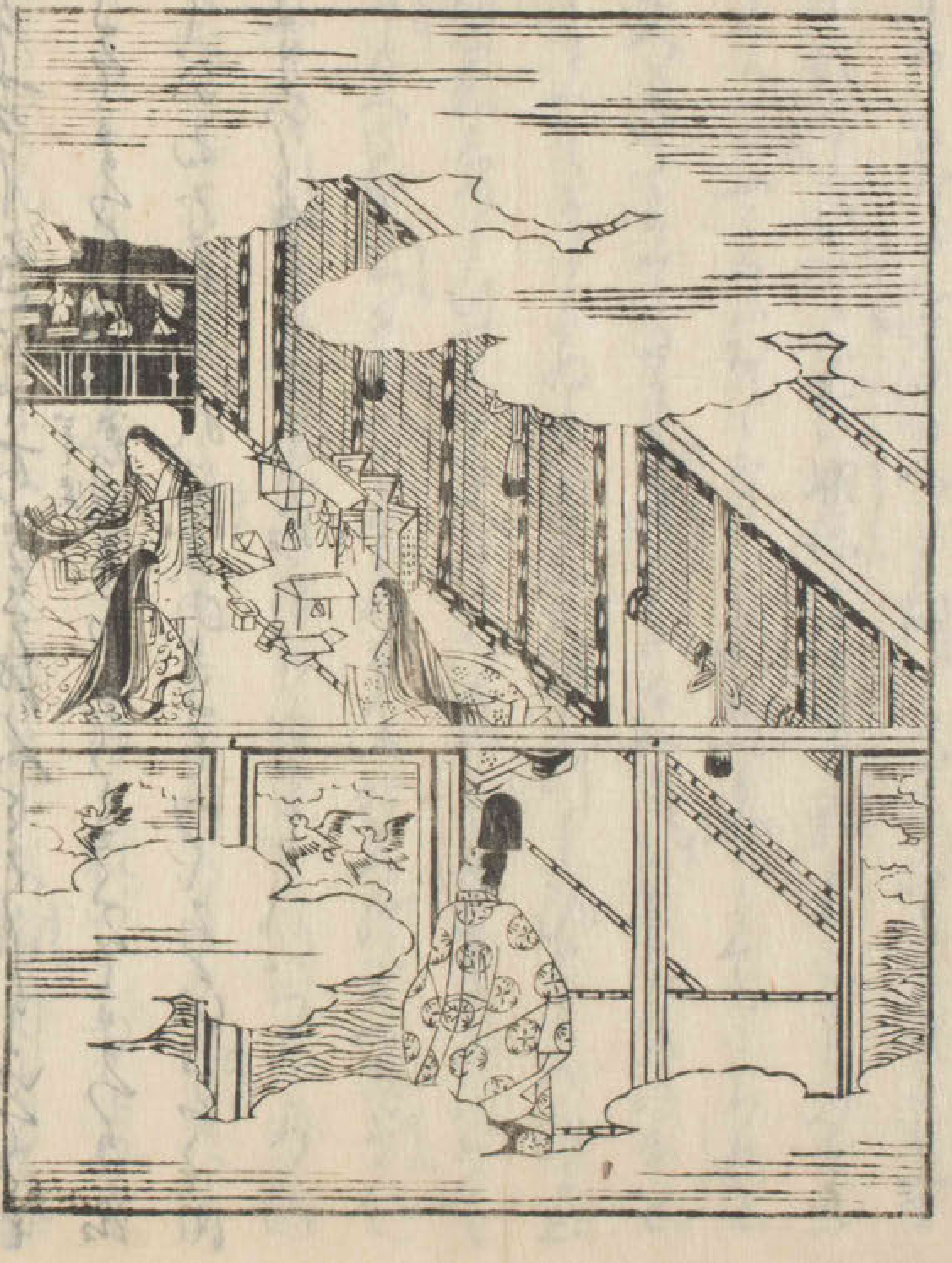
八

あくしとうくるるつさきをけお彌陀ハおほしめそれ
りしきう代さうわれ、是もて阿弥陀人のこれ此事を
おほしてれをいひとひまもいのうこきてしなひし
松のれさうしうやとおほ抱おほいよみのいとやむ
じつみくてあいいくしこうしこおまるうくづるひ
誰まてずまことるおでなすびのちんほどるいむつし
きうしもやさ笑しけつされぐくさうわさみせひ
あへるれおほてのいかどいとさみもげなうし
かぐくすいこ月をそていとてでこれるいめづなこ出
あさすうやもみすくてあひのぞ誰しうバやのぶしゆき
英はいあしくそ詞紫山かさまちのうぶうとれあれさ

うらうらすどときさのへるさ歯いうかしりまあうし給ふ
しげみちうしこぞハ朝拝まいり給ふとてこしの
ゐてりぶふようハおとなしくなりまへりやとぞうちゑミ
ゐへるがゐでたう愛敬つきたまへりいつしかひゐなを
しまへてゐのへうごとのさげしひとよひとよ
れゐれたうひすへて文らいさんやたつりあけめて
なのへとを所をさきまぞあそひむろげなへうなや
らさそぶぬふたこれをこぼらゆるされバつくろひ
くべうぞしていと本妻とおぼいくりけるいと
そろなさきへのこわざにも侍られいまつくろし
ぜんぐんがるいとしておすい給そとそ

あふなしきいと所をきばんべきしまいぞきよ
そまつれバ姫君まちいでてきこえまもり給
てひゐなれ中れ源氏のきみつくろひきこえ御
まゐらしせたまふし給

こゝろしづまりすゞしおとなびさせおはしますとかり
あまのりぬるかへいひおおあそびいつとそべるものを。
かくれおはしますなどまうけてまつりおそれはおあな
べりしにあやうてきこえし尚侍そのあはれぐ
しまひける程をそゞろにあはれうくきこえ給などお納言
さまあはれおそびはのこ心いれのまへれど。つげりしく
おほせならんとてさへ紫ごろのうちは我はは男
ありけてかりけんでのおとこにとてあるなきまゝて
まことはれ。これはくおもしげるわづきへとまもうり
けりなく今ぞおぼしありけり。さは地へど。これ年
のうせでさふしたまへりしうくおさるるさはれけ



かひのとこはなれてたちされどもとのうらのへ
もおやしともひたれども、ほくろうけりあはれ
かひずしなすんとはむくぞりそり、内より大殿は
おのでのへり御のうちもしうらのそばしをされらく
まずて心うけらしきされ気色もすくらしきれども
しようぶはずらしよのづきそてあしとあすれ心ひしど
いろはうれしうらんなずらぶらしのへどかずらん
すへてりしづきて結とさへてあしのうハやすむどく
なく笑しきずめてさらはもそくに心のうは
れてはらくでくそけりしてお目はさるべし未
わてこまへしぬやうはまそてなすしてされてるけ

上

かひなくえても心づくしにすけいつくへなどうら留も
のぞるはなれ人へよりいどよくなすらふらせけりける
こゑかうはおもしすれバうちすげしげかり
まりまとくの傍りてらし緒たまるとくハこれ人乃
あるぬ雨ハ抱しのふ我心のあまりそしるぬむさ
ひまうくうしきられさそまつるそうしとおぼし
ちうう。おうのこたゞとさゆうまでもおぼしやむごと
なくおはすうが。こやむらしまひとらいけさうしづ
さ給ハれ心をどりいとそろよなくてすらうしもなそうら
なまとつめがなしとかひそそしのへる浪おとこがみ
もだまどくうらいとさうしすこしなりはいのすふけらうのへ

ぞそどもなかるべし。おもしろくかれもしげりてさ
は心とうしとせひとえしはなすしゞえてもうり
あふとえばうしこもやされてうしつくさいとなみ
きえしおふぼとあて出給ところまさしのなさきてヽ
はさうぞくさのつまふかきはおびでげうとく
きてやつりのそではぞればうしろうひきつくろひる
よはなかどとゝめぬぢよりよしのふいとおくれなう。
これはみなひえんなどいふこともはなかうはさやう乃
おりましてなどきこしのへど。そかれはすきれなも
給り。これはさだめそれぬさ夜なれぱみなんとてぞおなて
さ世なりのふげまよろげまりしづきそくえ

有り給まへけるひありさ夜さるまでもかうらん。
そいぶしつれてえんまふまへとあしゞとさ
うまのふさんざしまよてもおまゝところわなあり
ゐ給ひす。内裏ぶ院ぶ（桐壺ハ门 朱雀院 寛平法皇ニなぞらへさき）ありさてハ御つぶの三條乃
えやうそでまいりうまへると。日いかうとゝまうえて
給ふおぼび給まゝまゆくさゝきまでなりまさり給はれ
ゐりさ夜るゝ人ぐめで字ゆの家は木丁のひ
おはりほのこえまのすまつけてもおもほえこと
さげりかり。（御つぶのはさんのとく）こればしのさくそもちうしぶ心
まとえうなまさびはいさりともとえやくへ人も給ふ肉
まもさるは心もうけどもあるまでつれなくてそちめ。

これはのゝしりけるやと世人もさゝめくどもやいと
まさしうこそみしよりもものいとゞかなしみけりめ
べきことゝおぼしめすげくなれどもいとくるしく
てなやみ給。中ねのみこは涼いとゞいとほしうおぼえてぞ
ほうちうにはなくて、扇くまちさせ給。世の中の
さふらふさまにつけてもかくされくてやくとん
とうあけのてなげき給。二月の十日あまりの
程に、おとゝ冷泉院のみこ生れ給ぬれば、みなおなす御門も
家人もよろこび聞え給。命婦あるくもしおぼすは
心うるれど弘徽殿などはうけそしげなのあをかく
ふかくしと苦しなすりしくきくあの給はまのしらずゞ人かく

上十三

れる物と覚しつゝてなんやうやくよろこびつゝ
そやいかひける人の御はしゆかしげなり
おぼしめしたるもおかしくおぼしめすに人忘れぬ御心
まゝならじら心すなくあてくまつまつりけなとて人
のおほんれゆるすら聞えさせ給ひてまつり
て美しう給らんとさゝして女御どもむつましげなる程
あれいふでをなむるもとてしうもとすらさかい
いとあさましうめでたうみゆまつりしよりし給
へるさま御おほふべくもあらず、宮の内ころのさまあく
いとうしう人の心までもるゝもあやしかりつる
程のおやまちどもの人のせひざかしやさしゝぬ

くらゐさりしとぞ、ぞゝまゝらず。すゑをもむかへまほしくおぼしける
御のつぎまゐりゆべきよりこゝ、おぼしつゞける。
春のみやぞいとゞ心ぐるしく。今上女御の君はさまざまにあはひ
のぞかうじこなたと、どもつゝしみの人ど、みかどの御のりひ
かうべきなまもあるべからず。わか宮のれいことならずたゞ
かばかりつゞけり宮たちの人いまだまだぐうしもあれども
まの御ぞみすらん。今をのりくらゐにてまつりぬ世給
てんとこころえたまひぞ。ゆへるさてこゝろまかせおぼしあかず
なをこずらるはかりごとにおすれば、御まもえの給
らで、いうなかんせよ。人づてにおすゞでまをしさせん
とて、なれへの御身ぞ心ぐるしき

つゝき御まむかしもきこえべる煩にて此世をさるか
御中比へだてゞぞかゝることゞもこゝろぐるしくがゝれと
のみ。今上女御も二の宮のおほんはしらきこえさせまゐるさ御あるかぎ
とゞめまゐらえりしたまふも御つかひけるうちきこえたま
ゝてまさらにめでたうおぼえ給ふにもせんじやせ世の
人のまじらひてやゝおもふれば心ゆかひたまさかもしく
どもなりまし。紫の上びてはさまざまのこいひや
なくてかへりまた御かたの人のまたいひもさらにつく
しことをうかゞはせとまの御かたをみかどもて今上女御
とも昔の御願どもやうやうまゐらせうちとけむすび給
らず。人めかしくそのかへりてなかしのみかど

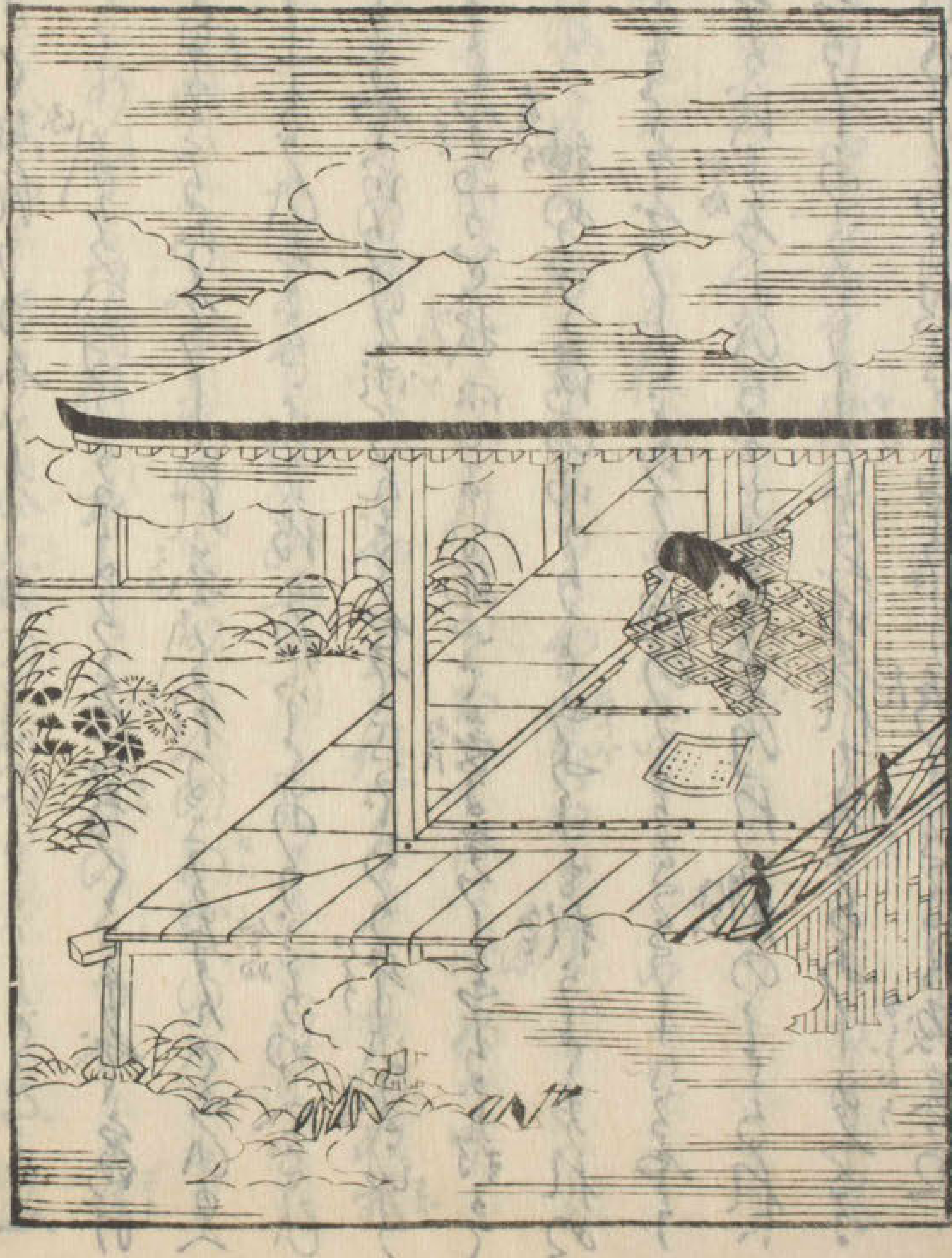
うち心づかれしとかばかり時にあらんべきはいとま
びしくもひのかみち心ちまへし四月に間へあり
のたまはせらうハおぼえまたおもはすけのみひてやうく
おきさうくらなぎし給ておさなしさまでまうでまうざれ
なさされうかつさと覚しらぬまよりのしはれ文
あすしびたのさざちハげようひまへるなるとてやさお
まほしうらいうしづりおもはしきつくしきうざう
あうし源氏の君をうけさりたまふ地にも覚しめされかさ
世の人のゆるしきうも出まのしうらしをよりてげう
おもえずへなまず嫁ましさおずかるちかしらゝて
人すてるくしけなきされ有様のうちまわびまそおい

するとなくらん思ひあくまに心ざましくみえしめすを
なりやむごとなきれさらくまおろすしひかりかてしる
しむかへれバさすなかさむとおもはしきしづくる
宮内いらなるまつけても思ひのひまなくやすからず抵
ともおもはえて例の中将の君まなるとうそれおそびけれど
吾妻すゞきしたそすてまつせまてみそうちおはる
あれどなそまのさなんうのほどより明くれ
れいならさうしまやあらんいらしくしてそおほし
それちうさき経いれうくのまあうわざうやいはら
むとそいふうしくうけらしさせのなうくさな地絵
へり中将の君おそれの家うち心ちそてあそうし

うちうちにけすくなうれしく我身もよもうらめしく
いろ／＼心をつくして涙おちぬべし。抱ものとらるゝ山
うちゑみのへるがほをしゆかしうまいらしく思はしきさま。
我皆をすてしられなくてこんハじらしくて心うき
お身し徒ぞ何すぎちるかや。宮ハかりをのくさつ
てこよなきおもくもなずれてぞおもしけつ中将い中く
あまり心からのみをとゞろくやうにあればすゝでもらひぬ我
れうちよりしてもののやるをくころさゝが猶恥ぞ
てお身いうのへとあらば此をまうへのお我のなるゝ
をうかはきいうれうかまにとも夜のなるやうの宮
出うか我わしせんみて今ゆ嬢の身のもとをもうくるゝを

こゝもはりうべし
源ひとへいひこゝろよころいちうぐそなって寂け
さものころなをそしられ笑へ入れまゐらせなんとせひむ
しもがひなすらのまゝ待つれひあり。今姫めへきひ
もうやはりけんおうんざもせてふぐちら耳ハ蓋ひ
まゝ穿ゆるを我が心をも抱へて我は笑ミしもすす
袖めに露のゆかりとせちまも抱うくまれめ
やまうずなにすぞりはのつまこゝしきしころや
みまば今姫ひるゆるまへ源氏の例のとゝるれハ
あらしめしうしょうぞかれてかずめてしかへるう
むかうすみたをてはうじう嫉しきうのも浪落ぬ

いくとつくろふもやすからずこそ思ひしれ
御のなぐさめにはたゞこのさいしのぞやみ給はざりけ
むすめうちつゞきてすべるびんぐさにあかぬれんかな
よらさえずるにて。ふえをおほけなしとうかうかし
きひつゞのぞうきのすへれば。女ごあらつる方の露よ
ぬれさうらちまつりて。そらひかしのすへるさ給うけく
よううしろげなり。あいぎやうこぼるゝやうにて。
おはするにも。まづかなしうめしうらうめしう
なればこれなりむこ君すへる方ならべしぞうしのうち
つゐおもてこちやとのすべぐおどろかず。ぬるいて
のとくちびるぬひて口おほひしぬへき給はいとう



うざれてうけらし。あかさつくらうこよくうちみられ給
まなりなみろめまあくいまのそゝさこよ。あとてん
めしてれ琴さりよをてひきせなりのふさう乃
琴は中れはてをのゝえがうさてて前もけ給ふて。
平調まをしらべて。あつへ給うさあくせざらり八
さそてきうしやりのすへれば。え思しもろそでいとうけく
しうひきのすぢいさ花れ待まさしやりてゆし給
ほてつきいとうけらしされどもうしとおぼして
笛吹あそしけるあそへ給いとさらくてうつさ
拍子どもをさぐ一ゆうりまおすゑひざうしますふ。大将
らうくきつりなりしされころぎへを。思し事

そうふとおぼしてろくきうといふみ。花はいうい
それども。おほしうちふくさこそあしのまへるまゝなさあい
せまぐりけされども拍子しらずよまめきうりおほし。
かぶしまいりて思ともなまじめらんずるまゝにぞのまゝ
しとゆりつれば。へさこはづらり宮にて。毎ふり給ぬ
ごろまぐいふま。姫君御例の心ばそらそてらしのまへり。
思もうさうしてうけづしておいしされば。いとらうらく
てけらしのいとめでらくこぶれうらふうとぞうらさ
なそく絲なりほど。いと悲しくやあつとのくすのへぶう
なうさきのふ。哉よ。ひとひもうそてまつしめたしいと
かるしうしそでされどもおきるゝおりすりほどにはくろや

すこしひこえて、まゐれくさくかへしむかふ人
の心やすげにとおもひて、むつましうれだしくしだし
くもありしぞ、おとなしくうれしくてははゝ人もさ
るまいくあまじ人の御ことおりしおまもおもせは
なかりありて、ぞふさ御ましなからんと思ふぞなとど
こ御くとりかくしひきさてしあへだ、紫すゞましけり
しりてとゞもりくもいくへきてし給ひぞ、やかてそれ
ひざまうちりてねいりのひめれど、いとくうろ
ぐらしうてこしひいぞぞぬめしのくまの人ばられ
ちかておものるざしるまゐつせうう、姫君かれ
うしふありかひていてすぬめきさしのへぞ、紫おもくさ

きておくさのへり、まろとはまかれなとまいりつゝ、いと
うちなすげなすさひて、さうらいねの御ひなうしとあやう
げなおもふの人々れば、うちをふすてゝたゞうち道
なりとも、さもむこさくてたえて給ふやうなとくかう
れなふおもくなとも、おほうらば、なかれけうさもあり
さく人、おほいとのゝあさてしられど、これなるらん、いと
めざ御きさことはもあうれ、いまゝでさへ人とも
こえてず、さやうなまゐりしうられなど、すゝんは
あてやうな心なるさ人にはあらじ、内わたりなども
まて、ちゝかるく給けん人をも、めしいでて、へや
とゞめんとうくしのなかも、心なげないとけなくて

むかしはなずぐさうつぬ人々もさぶらしあへりうち給ら
はまうくる人ありとさうつめていとおしく給
とくの思ひなずげうなずうこともげにあげなずり
琴をおほかく抱しう心なきやうばう乃
まうなづくあやうにあしばなずくなすさけ
なくいまそなすさるかなずでの絃は迄れどもすこ
まりしうさ後こそ此いく人まさそしかられなむ心
ゆうめなずめりといとおしくおほしめすさるハすき
ずきさうちかくされてびこゆり女房にまれ。
しるさうるさの人々なぞおへてるうずるゞまえて
ささしぜめりといふるさものゝ後まうくれある

さてかく人々も恨らしかんとの絃事こうどの
流年移びさせのひぬれどもやうのつくいえずぐ
させ絃は守。家女院人なまともなうちうちあるとべ
ひとくまもてなやしおほしめしれべよしあう
そやづく人々おほかうこころなすりでうるすきこもとを
いひかれ絃のはじめてうなることもおりがくつさてま
めみうくつやあらんげまでのやしきうすへつまい
ざめりとざうろまがされどもとをざさうしろうな
どすうおりおれどもなずきげなうしぬほどまうち
いへて。あとしまはそぶれしまさめど。まあやうり
きうぐくしとせひきさてありうの人もありがとしいそう

老たる内侍のすけ。人もやんごとなく。心ばせありて。
あてにおぼえたかくはありながら。いみじうあだ
いたる心ざまにて。そなたはおもからぬを。あやしう
かうさだすぐるまで。などさしもみだるらんと。いぶ
かしくおぼしのたまひければ。たはぶれごといひふれて。
心みたまふに。内侍はにげなくもおもはざりける。源氏はさすがにかゝるも
おぼしなずらふるにすゞろなるもおかしうて。袖などもすぐ
のみてかれど。人のもりきかんもふるめかしきほど
なれば。つれなくもてなし給へるを。内侍はいとつらし
と思へり。うへの御けづりぐしにさぶらひけるを
はてゝ。うへはみうちきの人めしていでさせたまひ

ぬる程に。また人もなくて。この内侍つねよりも
きよげに。やうだいかしらつきなまめきて。さうぞく
ありさまいとはなやかにこのましげなるを。源氏は
さもふりがたうもと。こゝろづきなく見給ふものから
いかにおもふらんと。さすがにすぐしがたくて。裳のすそを
引おどろかし給へれば。内侍はかはぼりのえならずゑがきたる
をさしかくして。みかへりたるまみ。いたうみかへりて
べれど。眼のかはいたくくろみおちいりて。いみじう
はつれそゝけたり

けんふつしけるあふ扇のさはかりてもとほひてかう
もなくるまをしかへてそのへんおりさうみのう
けるかりも文かきさしまいらするまちのうゑを
やりつるしかりつるまでいかときこゆれすれと
それからしなすらず身りのあるくさおいぬれ
むかしからそひうちにかをくしまゐれておれは
うらその心かへやと思あれるかへりしそでの
くさゆめかとてかくまくれとのかふまいけるくんや
いけんとくるしきは内侍かはもおもひしらず
内侍あしそばたちれの鞠さうかうんさうりすき
ある下葉たりともいふさはかるう文めさくう

ほゝさけが人やとがめんいけとらて猶なすゞく
めぐまりのすがたれけつらうしみさまとらてしら給を。
ひつ人ていまぶかつかしれとまてもひらへつね。今さら
なり君のもちずるなんとみておく夜はいとゞいらへじいま
ゑさてんせひなずらそやとて引ちかうちてむかふ
ともめてそよびて何くらとようしきかるとうへ
はぢらうちこさらて此障子のうちよりのぞうも給
さりうれけからうしぬおもひわれとぞおうしう
おぼしめされてすゞさ心なうしうねまとでるや
めのけさはいへどすゞくさすかつけかいとて。やくそせ
おん人が内侍は夜まばゆかれどおくうしめ人ゆへいぬれ

こふぬ事ならまほしからず見も有なればこそ
くるしもあらぬひきとしさせて人どもせひのを
なうしとれとおりふめの頭中将きてつけて。
いふらめぬくまたなすき心まてはまぶせひらすぞりけり。と
やかまづさもぬ好こ心もこのかいしう娘まるれが。
さらひつさまなり。しあんも人かりいけてとよるる給
みつれなすさん人のけみすくさあるよくかひつれど。
みまかしきはうさうけうとやうしてその夜
くやいふう志のふれが源氏のあいえまり給うて
まつけこさてしていまげうしき字ゆうとようひの君
てくおしうれがたすくさあんとおぼさどがるゝぬ杯

うきまでひさしうなりにけるをゆふだちして
なごり涼しき宵のまぎれは温明殿のわたりをたゝ
ずみありき給へば此内侍びはいとをかしう
ひきゐたり御前などにてもおとこがたの御あそび
にまじりなどしてことにまさる人なき上手なれ
ばものうらめしうおぼえけるおりからいとあはれに
きこゆ瓜つくりになりやしなましと声はいと
をかしうてうたふぞすこし心づきなき鄂州
にありけん昔の人もかくやをかしかりけんとみ
ゝとまりてきゝ給ふひきやみていといたうおもひ
みだれたるけはひなり君あづまやを忍びやかに

うたひてよりゐ給へるにおしひらいてきませと
うちそへたるも例にたがひたる心ちぞするや
立ぬるゝ人しもあらじあづまやにうたて
もかゝるあまそゝきかなとうちなげくを我ひとり
しもきゝおふまじけれどうとましや何ごとを
かくまでとおぼゆ
人づまはあなわづらはしあづまやのまやの
あまりもなれじとぞおもふとてうちすぎなまほしけれ
どあまりはしたなくやと思ひかへして
人にしたがへばすこしはやりかなるたはぶれ事など
いひかはしてこれもめづらしき心ちぞし給ふ頭中将は

しばしのやくくまあぢちをぐしてつねまきどきさ
さまゞのくさばつれなくてうちつくまほ思ひのまゝ
きゞくおほえあるをいふでこわうきんとのこ思
ひわくるまいれをまうけるるちいやそうれし
ううおりまずもしをどしこそしてけころうまど
くしてこうぬやといちんとあひてじめかさし風
ひやくうまうちまさそてやくかけり福まどそうく
まじろむまやところゆう宮文あすればやとらりける
まさむいにうけて志も○給をぬこゝろあれぼふとこゝて
つけてば中将とほあひまゞずなみをこ志籠くすゞすゝ
すりのうこゝのまてありそんとかばとまゝめとれく

あきさ人まうくるげなきさわるまゝひをゝてこうけう
わんそはきげうしされば源氏のおわづうらいうでうあん
よくまれわうまのひの志うりうんまれをも心うく
もうし給げつゝのまてあまをしづうをありて屏風
のう志ろの八あめ中将おりしきのえんあそて引
まそ給へる屏風のましくまかりてぶかくとくてみ
あきてあどろくあうさばすま内侍のなびきれど
ひさくようしてゝおすうびさうう人のき紀づくまうや
まて心うごく守おりくはりされば思ひてかゝし
く心あはらしさてゝもされ源をかうましそゝて
めうまうしくまびしきり。あうまね。くいよくひ

久しうられとられてゐてなかやとおほどきこえ
どけなきこすずみてかくかりなすきうちゆかめて
くちんうちろでおふまいてもそとなすへしとて光
しやすらふ中将いろで我ともあれこそしたと
思ひてあれもいかずおもていかじういわれ御けしき父君も
てなりてふちをひきめけれど女あかきみしくと
むかひてゐとするまま姫じくわらひぬへし

これはあしうわろやうそてはてあるしかるへくべき
そうそしもなりけれ。五十七八の人のうちとけて
物あひけるらひ。えたのしめ。二十のころの人にかれ
中あまて物いろらし侍るにつきあうしかうかう
ぬる御まはてひがあておそろしげおするわろしき
なきかれど中しくまうそうけるて。我とまう
てさしきうしはすうあまりかりと。おもうはあしりぬべう
の人なのありとこのあまいふをおりしられぬべきらぬ
ふるまうひおは侍せんてうやいそうつきの人なれど
ねまさこえりしえんへてわしひぬものかはる
いかしいだりくまいてしられなくしや。うてこれあ

ねかしきんとのあへどうしあんへてさしうつは此おか
しふさうしすぎくば。よろともまなしてしまあ
中ねの常をひのまさとはさてめでをあへぬめしじかく
をまのみそそくひきしろいろ種のおうろびて絹
ろくとしくめて中ね
つむめろあやまりいずんひこそはしかく
ほろうぶう中のしろうまよりんまとりむくぐまうか
らんといふこと
くつれるきぬ抱とまうし夜哀ころるとうすき
心をそでみうぞいひかくしてうしやこれがきまいと河
るまさすかうかり。おすされてられ出のあ哀いやくら

おしくだけられぬるこそおもひのまゝなれ
内侍はあさましうおぼしたれどおちとまりたる物は
さしぬきおびなどつとめてぞまゐりける
内侍 恨てもいふかひぞなきたちかさねひきてかへりし
波のなごりにあさましくはづかしと源氏の
御返事やとうけ給もなくてかへりぬるとおもひ給
さすがなりける
源 あらだちし波に心はさはがねどよせけん
磯をいかゞうらみざらんとのみなん有けるおびは中将の
なりけり 源 わがなほしよりはいろふかしとみたまへて
はたそでもなかりけりあやしのことゞもや

おりたちてみだるゝ人はむべおこがましきことも
ありなんといとゞ御心おさめられ給ふ中将殿の
宿直所よりこれはまづとぢつけさせ給へとておこせ
たりけるをいかでとりつらんと心やましく
これなかりせばとおぼして その色の
かみにつゝみて
源 中絶ばかごとやおふとあやうさにはなだの
帯はとりてだにみずとてやり給ふ 立かへり
中将 君にかくひきとられぬる帯なればかくて
絶ぬる中とかこたむえのがれ給はじとあり日たけて
おのゝ殿上にまゐりたまへりいとしづかにそらおぼれ

さ様しておもしろきは歌の君もいとおかしけれど
あはれやけしとあはれくさうしんて付日まてみゆいと
うつくしくすくよかなるをぞとりまもるに御心を
ますら人君のまさしよりて袖かくしもりめしん
しもそいとの子けふまめしもなおぞてかきし
もあらん道あるかしくへりけん人してもいとあはれ
あらはうしや世中にいとあさせてかくの山
みするとかくころにうちかくそむきて本の浦がれ
とものつゐぞかくよいひむらふぶきさひあかる紙
いくじ袖むつらしき人おとあはれしまほるべし女
しかいとえんま紙をかくわびしくあはれ

ありさまは世中ねいいまうしとの君は男でいそかいふく
きさんべきありのまうしくさるさんとてあまひけき
やむごとなききれはしくのみことちぢみ内の
れまでるしのまなもてかうかうていと
とるさうくさうしまへるそうら世中ねいさうしるなり
そられてきそしとろるまさとまつかてもらひ
いとこきさうし紙代君ひとりて妻君の御ひとつかう
なりけるみそのれ子とつかうまつるもてなれ我も
あるじ大臣とこそあれどれあはれとなすかかんこ
とうしてまたうしつれるは何ぞうりさとる
べきなるとあはれしまるあみするべし人からまあり

べきならくのひて何事もおもほえてくらし
てぞ見えし給けるされば中よりのはじめんとして
あやしうりしかされどうるさくてたん七月まで
みこさこれおのまかりし源氏の君宰相になり給ぬ
みかどおりゐさせ給ふんの心づかひちかう成給ぬ
此若宮を坊にとおもひきこえさせ給はれうしろみ
給べきひともおはせず源氏をそうじてたのみ
て源氏のおほやけごとつかうまつる給ふべくおぼす
とぞ聞うとなかなか嬉るにもあまりて成よう
まておぼすをなん内にもけしき弘徽殿いとく
びろき給こそゆかりみそれども春宮の御世いとちかくなり

上二十歳

ぬればうたがひなきされ位なりおはしのぞめよと
ぞきこえしさせ給ひけるげに春宮の御母まて世のまゝ
まなりまゐるかれを正ときそまかりてれ行こしして
まゐりのひかりさこえたまりしと例のやそうしに
世人もきこえくらまいらせ給春の御とも宰相の君
もつかうまつりましふおそなしきこえれとらさくて中ゆ中
まもさまいでそのみこむのひかりやこえてる
かひなうされおぼしまさんまみしさらぬ人々も人も
いとしくもなひそのひかりのつきそきして
なりぬされ心つ付れつのうちもあひやられてかたどく
とよひ給のとうちし給まなるとうしもすれそめでなん

つきもせぬ心のやるかたなく雲ゐまへ
かぎりはつけてもよそのひとりごちれけるおれは
とあくれなりみたるおよすけの上ね日まちく
かひていとおそくまつりかきかげなすつと交りと
くるしとおぼさぬ出ひらかへるさなあるかけ
いる所なけるかへてはとかめれありき庙なる
ぞあれし給くるし有日のひらの空まる
ひかるやうなぞされ人もおはなくる